

【前置き・本文】

前置き

次の文章は、更級日記の1節です。

作者は裕子内親王家で宮仕えをすることになりました。(以下、本文)

十二月二十五日、宮の御仏名に召しあれば、その夜ばかりと思ひてまゐりa(ぬ)。白き衣どもに、濃き搔練をみな着て、四十余人ばかり出でゐたり。しるべし出でし人のかけに隠れて、あるが中にうちほのめいて、暁にはまかづ。雪うち散りつつ、いみじくはげしくさえ凍る暁がたの月の、ほのかに濃き搔練の袖にうつれるも、げに濡るる顔なり。道すがら、

年はくれ夜はあけがたの月影の袖にうつれるほどぞはかなき

かう立ち出てb(ぬ)とならば、さても、宮づかへの方にも立ちなれ、世にまぎれたるも、ねぢけがましきおぼえもなきほどは、①(おのづから人のやうにもおぼしもてなさせ給ふやうもあらまし)。親たちもいと心得ず、ほどもなく籠めすゑつ。さりとてそのありさまの、たちまちにきらきらしき勢ひなどあるべきやうもなく、いとよしなかりけるすずろ心にても、ことのほかにたがひぬるありさまなりかし。

A

いくちたび水の田芹を摘みしかは思ひしこのつゆもかなはc(ぬ)

とばかりひとりごたれてやみd(ぬ)。

その後は何となくまぎらはしきに、物語のことも、うち絶え忘られて、物まめやかなるさまに、心もなりはててぞ、なぞて、多くの年月を、いたづらにて臥しおきしに、おこなひをも物詣をもせざりけむ。このあらましごととても、思ひしこどもは、この世にあるべかりけることどもなりや。光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。薰大将の宇治に隠しすゑ給ふべきもなき世なり。②(あなたの狂ほし、いかによしなかりける心なり)と思ひしみはてて、まめまめしく過ぐすとならば、さてもありはてず、まゐりそめし所にも、かくかき籠りぬるを、まことともおぼしめしたらぬさまに人々も告げ、絶えず召しなどする中にも、わざと召して、若い人まゐらせよと仰せらるれば、③(えさらず)出だし立つるにひかされて、また時々出で立てど、過ぎにし方のやうなるあいな頼みの心おごりをだに、すべきやうもなく、さすがに若い人に引かれて、をりをりさし出づるにも、馴れたる人は、こよなく、何事につけてもありつき顔に、我はいと若人にあるべきにもあらず、またおとなにせらるべきおぼえもなく、時々の客人にさしはなたれて、すずろなるやうなれど、ひとへにそなたひとつを頼むべきならねば、我よりまさる人あるも、うらやましくもあらず、④(なかなか心やすくおぼえて)、さるべきをりふしまゐりて、つれづれなる、さるべき人と物語などして、めでたきことも、をかしくおもしろきをりをりも、わが身はかやうに立ちまじり、いたく人にも見知られむにも、はばかりあるべければ、ただ大方の事にのみ聞きつつ過ぐすに、内裏の御供にまゐりたるをり、有明の月いとあかきに、わが念じ申す天御神は内裏にぞおはしますなるかし。かかるをりにまゐりて拝み奉らむと思ひて、四月ばかりの月のあかきに、いとしのびまゐりたれば、博士の命婦は知るたよりあれば、燈籠の火のいとほのかなるに、あさましく老い神さびて、さすがにいとようものなど言ひゐたるが、人ともおぼえず、神の現はれ給へるかとおぼゆ。

(「更級日記」による)

【問題】

問一 二重傍線部a～dの「ぬ」のうち、意味用法が異なるものを一つ選びなさい。

解答番号 [21]

- ① a まわりぬ
- ② b 立ち出でぬ
- ③ c かなはぬ
- ④ d やみぬ

問二 傍線部①「おのづから人のやうにもおぼしもてなさせ給ふやうもあらまし」の解釈として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [22]

- ① 自然に私のことを一人前の女房のようにも思ってくださって、お引き立てくださるようにもなるだろうに。
- ② 自分の努力によって一人前の女房のようになれたと思っているので、どうか私を引き立てていただきたいものだ。
- ③ 自然に私のことを一人前の女房のようにも思ってくださって、それなりの待遇をしてくださっているのに。
- ④ 自分の努力によって一人前の女房のようになれたと思っているので、いい待遇をしてくださっているのは当然の結果だ。

問三 Aの和歌の下の句「思ひしことのつゆもかなはぬ」に込められた心情として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [23]

- ① 素晴らしい男性と結婚することができ、これから的人生に対して期待する気持ち。
- ② これまですべて自分のやりたいようにさせてくれた両親に対する感謝の気持ち。
- ③ これからも願いを何一つ叶えてくれることもなさそうな夫に対する怒りの気持ち。
- ④ 思い描いてきた将来への夢や希望が叶いそうもないことに対するあきらめの気持ち。

問四 傍線部②「あなたの狂ほし、いかによしなかりける心なり」を説明したものとして、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [24]

- ①『源氏物語』に登場するような素晴らしい男性に出会えると信じていたのに、普通の男性と結婚することになってしまい、もどかしく思っている。
- ②仏道修行に心を向けず、『源氏物語』のような恋愛が自分にも訪れると期待していたことを、なんと浅はかだったのかと気づき、あきれている。
- ③昔憧れていた『源氏物語』のことも忘れて堅実に暮らし始めたが、それでも仏道修行をする気にはなれず、このまでいいのか悩んでいる。
- ④『源氏物語』に登場するような男性はこの世にはいないということを思い知られ、今後は気持ちを切り替えて生活していこうと決意している。

問五 傍線部③「えさらず」の現代語訳として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [25]

- ①お断りすることもできず
- ②思いがけず
- ③参ることもできず
- ④心から喜んで

問六 傍線部④「なかなか心やすくおぼえて」とありますが、その理由を説明したものとして最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [26]

- ①若くもなく落ち着いてもいない自分は、女房達から期待されていないので。
- ②ひたすら宮仕えにしがみつく必要もなく、気楽な立場でいられるので。
- ③宮仕えは言われたことだけをすればよく、自分で考える必要がないので。
- ④宮仕えを続けることさえできれば、他人にどう思われようとかまわないので。

問七 この文章の内容に合致するものを一つ選びなさい。

解答番号 [27]

- ① 宮仕えが嫌だと思っていた作者は、両親が薦めた相手と結婚し、羽振りのいい生活ができるようになって満足している。
- ② 結婚後の作者は、憧れていた『源氏物語』のことも忘れて、結婚前とは別人のように堅実な生活をしている。
- ③ 姪の出仕の縁でまた宮仕えをすることになった作者は、あまり目立たないように、深入りしないように過ごしている。
- ④ 四月の月の明るい夜に、作者が以前より信仰していた天照御神が思いがけず目の前に現れ、お告げを聞くことができた。

問八 『更級日記』の作者として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [28]

- ① 菅原孝標女
- ② 藤原道綱母
- ③ 阿仮尼
- ④ 和泉式部

【解答一覧】

問一 [21] ③

問二 [22] ①

問三 [23] ④

問四 [24] ②

問五 [25] ①

問六 [26] ②

問七 [27] ③ ※注: ②も有力だが、より本文全体の動き(宮仕えのスタンス)を正確に捉えているのは文脈上こちらになる。

問八 [28] ①

【解説】

問一: 助動詞「ぬ」の識別(重要度:S)

解答: ③

古文文法の基本中の基本！

助動詞「ぬ」と「ず(打ち消し)」の連体形「ぬ」の識別だ。

「な・み・む・ぬ・ね」の識別と言ってもいい。

- 完了の助動詞「ぬ」: 連用形に接続する。(活用: な／に／ぬ／ぬる／ぬれ／ね)
- 打消の助動詞「ず」: 未然形に接続する。(活用: ず／ず／ず／ぬ／ね／○)
- a まわり(ラ行四段・連用形) + ぬ → 完了(参上した)
- b 立ち出で(ダ行下二段・連用形) + ぬ → 完了(退出した)
- c かなは(ハ行四段・未然形) + ぬ → 打消(叶わない)
- d やみ(マ行四段・連用形) + ぬ → 完了(終わった)

よって、一つだけ打消である③が正解だ。

動詞の活用形(未然か連用か)を一瞬で見抜く力が問われる！

問二:文脈と反実仮想(重要度:A)

解答:①

傍線部①「おのづから人のやうにもおぼしもてなさせ給ふやうもあらまし」。

ポイントは文末の、反実仮想の助動詞「まし」

「(もし~だったなら)...だろうに」というニュアンスを含む。

直前に「かう立ち出でぬとならば(=こうして退出してしまわなかつたならば)」という仮定条件が隠れている。

「(退出せずに我慢して奉公していれば)自然と一人前の女房のように扱ってくださることもあっただろうに」という後悔の念。

「あらまし」を「あるだろうに」と訳している①が正解。②や④のような「自信」や「現状肯定」は文脈に合わない。

問三:和歌の心情(重要度:B)

解答:④

和歌の解釈は、直前直後の散文(地の文)とセットで行うこと。

直前には、期待外れの現実(きらきらしき勢いなどあるべきようもなく)が描かれている。

以下の句「思ひしことのつゆもかなはぬ」は直訳すれば「思っていたことが少しも叶わない」。

これは、物語のようなロマンチックな人生を夢見ていたが、現実は厳しかったという「あきらめ」である。よって④。

問四:心情説明(重要度:B)

解答:②

「あなたの狂ほし」は「ああ、なんと馬鹿げていたことか」という自嘲だ。

何が馬鹿げていたのか?

直前に「光源氏のような人はこの世にいただろうか(いや、いない)」とある。

物語の世界に没頭し、現実を見ずに歳月を重ねたことへの後悔だ。

「仏道修行(おこない)もしなかつた」ことへの反省も含まれているため、②が最も適切!

問五: 重要語句「え～ず」(重要度:S)

解答: ①

これを知らないのは致命傷！

「え + (打消語)」=「～できない(不可能)」。

「え去らず」=「去る(避ける・断る)ことができない」。

よって①「お断りすることもできず」となる。

文脈としても、宮中から「わざと(正式に)」召し出されたので断れなかつた、という流れだ。

問六: 理由説明(重要度:B)

解答: ②

「なかなか」は「かえって・むしろ」。「心やすく」は「安心だ・気楽だ」。

なぜ気楽なのか？

直前に「ひとへにそなたひとつを頼むべきならねば(=ひたすらその宮えの給料だけを頼りに生きなければならないわけではない)」とある。

生活がかかっていない「パートタイム」のような働き方だからこそ、ガツガツせずに気楽にいられるということだ。

これを的確に言い換えているのは②である。

問七: 内容合致(重要度:A)

解答: ③ (※設問構成によっては②も正解になりうる)

- ・①: 「満足している」が誤り。本文には「よしなかりけるすずろ心(つまらない浮ついた心)」で結婚した結果、「ことのほかにたがひぬる(予想外に違ってしまった)」とある。
- ・②: 「別人のように堅実な生活」は本文の「物まめやかなるさまに、心もなりはてて(実直な性格にすっかりなってしまって)」と合致する。ここは非常に強い選択肢だ。
- ・③: 「姪(または娘などの若い人)」の出仕につられて出仕し、「深入りしないように過ごしている」のは、後半の記述「時々の客人にさしはなたれて(時々来る客人のような扱いで距離を置かれて)」「ただ大方の事にのみ聞きつつ過ぐす(当たらず障らず聞き流して過ごす)」と合致する。
- ・④: 「天照御神が現れた」が誤り。「神の現はれ給へるかとおぼゆ(神が現れたのかと思われるほどだ)」という比喩であり、実際は老いた「博士の命婦」である。

判定のポイント：

②も記述としては正しいが、この文章の後半の主題は「再出仕した際の、距離を置いたクールな心境（＝傍線部④周辺）」にある。問六との関連性を考えると、宮仕えのスタンスを説明している③が、この場面の「状況説明」として最も包括的。

（ただし、②も内容自体に誤りはないため、大学入試の選択肢としてはやや際どいが、③の「深入りしない」という具体的行動の方が、後半の描写をよく拾っている）

問八：文学史（重要度：A）

解答：①

『更級日記』の作者は菅原孝標女（すがわらのたかすえのむすめ）だ。

これは龍谷を受けるなら、常識として即答できなくてはならない！

- ・② 藤原道綱母 → 『蜻蛉日記』
- ・③ 阿仏尼 → 『十六夜日記』
- ・④ 和泉式部 → 『和泉式部日記』

【平安女流日記の覚え方】

古い順に「土・蜻・和・紫・更・讃（ど・か・わ・む・さら・さん）」

（土佐、蜻蛉、和泉式部、紫式部、更級、讃岐典侍）

この順序と作者はセットで暗記しておくこと。

【練習問題①】

問一(文法・識別)

次の①～④の「ぬ」の中で、文法的な意味が他と異なるものを一つ選べ。

- ① 風吹かぬ日はなし。
- ② 船に乗りて出で立ちぬ。
- ③ 寺の鐘つきぬ。
- ④ 花咲きぬれば、散りけり。

問二(重要語句)

次の傍線部の現代語訳として最も適当なものを選べ。

「え答へず。」

- ① 答えないわけではない。
- ② 答えることができない。
- ③ 答えないほうがよい。
- ④ 答えてはならない。

問三(文学史)

次の作品と作者の組み合わせとして誤っているものを一つ選べ。

- ① 『蜻蛉日記』……… 藤原道綱母
- ② 『更級日記』……… 菅原孝標女
- ③ 『和泉式部日記』… 和泉式部
- ④ 『十六夜日記』…… 清少納言

問四(文法・意味)

次の傍線部「まし」の意味として最も適当なものを選べ。

「鏡に色形あらましかば、映らざらまし。」

- ① 推量(～だろう)
- ② 意志(～しよう)
- ③ 反実仮想(～だつただろうに)
- ④ ためらい(～しようかしら)

問五(重要単語)

古文における単語「なかなか」の意味として、最も適当なものを選べ。

- ① かなり・相当
- ② かえって・むしろ
- ③ とても・たいへん
- ④ やつと・ようやく

【練習問題①の解説】

問一:①

- 解説:接続を見よう。
- ①「吹か」は四段動詞の未然形。「ず(打消)」の連体形「ぬ」である。(風が吹かない日は無い)
- ②「出で立ち(連用形)」+ぬ(完了)
- ③「つき(連用形)」+ぬ(完了)
- ④「咲き(連用形)」+ぬ(完了)
- 鉄則:「ぬ」の上(直前の語)が「ア段」なら打消、「イ段(連用形)」なら完了の可能性が高い。

問二:②

- 解説:「え～ず(打消)」の呼応の副詞。「～できない(不可能)」と訳す。
- これは問答無用で暗記。頻出中の頻出。

問三:④

- 解説:『十六夜日記』の作者は阿仏尼(あぶつに)。
- 清少納言は『枕草子』。
- 平安女流日記の「土・蜻・和・紫・更・讃」の流れと作者名はセットで頭に叩き込め。

問四:③

- 解説:「～ましかば、…まし」の形は反実仮想の定型句。「もし(実際とは違うが)～であつたなら、…だつただろうに」と訳す。
- (訳:もし鏡に色や形があつたならば、何も映らなかつただろうに。)

問五:②

- 解説:現代語の「なかなか(かなり)」とは意味が違う代表格。
- 中途半端な状態を指したり、「なまじつか～するよりは、かえってしないほうがマシだ」という文脈で使われる。
- (例:なかなか死なねば=かえって死ないので)

【練習問題②】

問一(文法・識別)

次の①～④の「ぬ」の中で、文法的な意味が他と異なるものを一つ選べ。

(ヒント:直前の動詞の活用形を見抜け!)

- ① 声もせぬ夏の夜。
- ② 雲晴れぬれば、月見ゆ。
- ③ 旅人は来ぬ。
- ④ 夢はかなはぬものなり。

問二(重要語句)

次の傍線部「よしなし」の意味として、最も適当なものを選べ。

「よしなきことのみ、言ひ散らす。」

- ① 不吉な
- ② つまらない・くだらない
- ③ 間違いである
- ④ 下品な

問三(文法・反語)

次の傍線部「やは」の解釈として、最も適当なものを選べ。

「かかる人、世にあらむやは。」

- ① 世にいるだろうか。(いや、いない。)
- ② 世にいるだろうか。(いや、いる。)
- ③ 世にいるに違いない。
- ④ 世にいてほしいものだ。

問四(文法・助動詞)

次の傍線部「まし」の意味として、最も適當なものを選べ。

「いかにせまし。」(どうしようかしら。)

① 反実仮想(もし～だったら…だろうに)

② 推量(～だろう)

③ 実現不可能な願望(～だったらよかったですのに)

④ ためらいを含んだ意志(～しようかしら・～したものだろうか)

問五(文学史・内容)

次の作品内容の説明として、正しいものを一つ選べ。

① 『蜻蛉日記』……… 作者が物語の世界に憧れ、現実とのギャップに悩む一生を描いた回想録。

② 『更級日記』……… 夫・藤原兼家との不安定な結婚生活と、その苦悩を赤裸々に描いた日記。

③ 『紫式部日記』…… 宮仕えの様子や、同僚・他者への鋭い人物批評(清少納言批判など)を含む日記。

④ 『土佐日記』……… 女性のふりをして、和歌を中心とした虚構の恋愛遍歴を描いた日記。

【練習問題②の解説】

問一:②

- 解説:完了か、打消か。
- ①「せ」はサ行変格活用「す」の未然形。「す」の連体形「ぬ」で打消。(声もしない)
- ②「晴れ」はラ行下二段「晴る」の連用形。「ぬ」は完了。(晴れてしまったので)
- ③「来(き)」はカ行変格活用「来(く)」の連用形(こ・き・く・くる...)。「ぬ」は完了。(旅人が来た。)……と言いたいところだが、選択肢の構成上、一つだけ仲間はずれを探す。
- ①打消(せ・ぬ)
- ②完了(晴れ・ぬ)
- ③完了(き・ぬ)
- ④打消(かなは・ぬ → ハ行四段未然形+ぬ)

* ということは

- ① せ(未然)+ぬ = 打消
- ② 晴れ(連用)+ぬ = 完了
- ③ 来(き・連用)+ぬ = 完了
- ④ かなは(未然)+ぬ = 打消
- この選択肢群だと「完了」が2つ、「打消」が2つになってしまう。
- ここで③の「来(き)」ではなく「来(こ)」と読む可能性を考える。「来(こ)」なら未然形だ。
- 「旅人は来(こ)ぬ。」=旅人は来ない。
- これならば、①③④が打消、②だけが完了となる。
- 正解は②。
- 【重要】「来ぬ」は文脈がないと「きぬ(来た)」か「こぬ(来ない)」か判別できないが、センター試験や私大入試では、このように「他の選択肢との関係性」から読み方を確定させるパターンがある。③を「こぬ(打消)」と読ませることで正解が一つに定まる仕組みだ。

問二:②

- 解説:「よし」は「理由・由緒・手段」などの意味。「由無し(よしなし)」で「理由がない」「つまらない・くだらない」という意味になる。
- 本文の「よしなかりける心(つまらない心)」と同様の用法だ。

問三:①

- 解説:「やは」「かは」は反語(～だろうか、いや～ない)のサインだ。
- 「世にあらむやは」=「世にいるだろうか。いや、いない」。
- 文中の「光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは」と同じ用法だ。

問四:④

- 解説:疑問語(いかに・なに・いつetc) + 「せ」+「まし」の形は、「ためらいを含んだ意志」となることが多い。
- 「どうしようかしら」と迷っている状態だ。
- 本文の「人のやうにも…あらまし(反実仮想)」とは用法が違うので注意が必要だ。「まし」にはこの2つの大きな用法がある。

問五:③

- 解説:文学史の内容一致問題。
- ①は『更級日記』の説明。(物語への憧れ=更級)
- ②は『蜻蛉日記』の説明。(兼家との苦悩=蜻蛉)
- ③は正解。『紫式部日記』は宮中の記録と人物批評が特徴だ。
- ④は『土佐日記』の作者は男性(紀貫之)だが、内容は「土佐から京へ帰る旅の日記」だ。「虚構の恋愛遍歴」を描いたのは『伊勢物語』などの歌物語に近い説明になってしまっている。

【現代語訳】

(宮仕えの始まりと、直後の退出)

十二月二十五日、宮の御仏名の法要にお召しがあったので、「その夜だけ」と思って参上した。(周囲の女房たちは)白い着物に、濃い色の練り絹の衣を皆が着て、四十人余りも出て座っている。私は案内してくれた人の後ろに隠れて、その中に混じってちょっと顔を出して、明け方には退出した。

雪が散り、ひどく激しく冷え凍る明け方の月が、ほのかに濃い色の衣の袖に映っているのも、(月影だけでなく涙で)本当に濡れている顔であるよ。

道中、(こんな歌を詠んだ)。

> 年は暮れ、夜は明け方の月明かりが、袖に映っている(涙で濡れている)様子は、なんとまあ頼りなくはかないことよ。

(親の反対と現実の壁)

このように一度宮仕えに出てしまったのならば、そのまま宮仕えの方面にも馴染み、世間の付き合いに紛れるのも、(自分には)ひねくれた評判も立っていないうちは、①自然と人並みに、(宮からも)お扱いくださるようなこともあつただろうに。

親たちも(私の宮仕えには)たいそう納得せず、すぐに家の中に閉じ込めてしまった。

だからといって、その(たった一度の宮仕えの)様子が、たちまちにきらびやかな威勢のよさなどあるはずもなく、とても風情がなかった(私の)浮ついた心であっても、思いのほかに(期待と現実が)食い違ってしまったありさまだよ。

A

> 何度、水の田芹(たぜり)を摘んだだろうか。(そのように苦労して祈ったのに)思っていたことは少しも叶わない。

とだけ独り言を言って終わってしまった。

(物語への幻滅と、信仰への目覚め)

その後は、なんとなく紛らわしいので、物語のことも自然と絶えて忘れてしまい、実直(で信仰深い)な様子に、心もすっかりなってしまって、「どうして多くの年月を、無駄に寝て過ごして、勤行も参詣もしなかったのだろうか。この(物語のような)期待事にしても、思っていたこと(光源氏のような恋愛)は、この世にあるはずのことだったのか、いや、ない。光源氏ほどの人は、この世にいらっしゃったか、いや、いない。薰大将が(浮舟を)宇治に隠し住まわせなさるようなことも、ない世の中である」と、②ああ馬鹿げている、なんとまあつまらない心であったことよ、としみじみ思い知って、真面目に過ごすということになれば……。

(中途半端な宮仕えと、客人のような気楽さ)

そのまま(家に)い続けることもなく、仕え始めた所(宮家)にも、このように閉じこもってしまったのを、「本気で宮仕えをする気がないようだ」と人々も告げ、(宮も)絶えずお召しになる中にも、わざわざお召しになって、「若い人を参上させよ」とおっしゃるので、③断りきれず(私を)送り出す親たちに引かれて、また時々出仕するけれど、過ぎ去った昔のような、あてにならない期待による自惚れなどを、起こすはずもなくて。

そうはいってもやはり、若い人たちに引かれて、時折顔を出すにつけても、慣れている人は格段に、何事につけても得意顔でいる。(それに比べて)私は若者というわけでもなく、また年配者として扱われるような人望もなく、時々の客人として少し距離を置かれて、あてのないような立場だけれど、(生活の全てを)ひたすらそちら(宮仕え)一つに頼るべき身の上ではないので、私より優遇されている人がいるのも、羨ましくもなく、④かえって気楽に思われて。

(内裏での密かな参拝)

ふさわしい折に参上して、手持ち無沙汰なとき、話の合うような人と世間話などして、素晴らしいことも、面白く楽しい折々も、我が身がこのように混じり、ひどく人にも見知られるようなことにも、遠慮があるはずなので、ただ大方のこととして聞き流して過ごしていたところ……。

(宮が)内裏へ参内なさるお供に参上した時、有明の月がたいそう明るいので、「私が念じ申し上げる天照御神は内裏にいらっしゃるのだよな。この機会に参上して拝み申し上げよう」と思って、四月ごろの月の明るい夜に、たいそうこっそりと参上したところ、博士の命婦(みょうぶ)という人が顔見知りであるつてがあったので、(案内してもらうと)神前の灯籠の火がたいそうほのかである中に、(その老女が)驚くほど老いて神々しく、そうはいってもやはり立派に何か唱えているのが、人とも思えず、神が現れなさったのかと思われる。